



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	年齢、獲得、定型：発達心理学における『発達』の前提となっているもの
Author(s)	川田, 学
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 7-14
Issue Date	2014-12-05
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.6.7
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57564
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_06_7-14.pdf



年齢、獲得、定型

— 発達心理学における『発達』の前提となっているもの —

川 田 学*

Age, Acquisition and Typicality: Rethinking the three assumptions in developmental psychology

Manabu KAWATA

トップバッターということで、乳幼児発達論の川田が報告させていただきます。私も「発達支援学」の構想段階、つまり研究プラットフォーム委員会¹立ち上げのところから関わらせて頂いたのですが、3年経ちましたので多少のまとめということで、この間考えてきたことをこの場で整理させて頂きたいと思います。

年齢・獲得・定型という3つの観点から、発達概念を再考する手がかりを得たいと思います。私の専門とする発達心理学において、「発達」を語る際の前提としているもの、概念規定といえますか、その前提というものを揺さぶることにより、「発達支援学」に繋げていきたいと思っています。発達概念の拡張を試みたいということです。

(1) 発達心理学における「年齢」の扱われ方

まず、「年齢」です。現代の発達心理学では、非常に典型的には年齢というものを独立変数のように扱い、一定の研究手続きを経て得られる測定値なり、行動指標なりに基づいて「発達」を語るということがあります。あまり心理学的な用語系に慣れていない方もいらっしゃると思います。独立変数というのは、実験状況において測定する事象の原因となるもので、人工的・系統的に操作でき

る要因のことです。実際には年齢が原因で発達するわけでも、年齢を人工的にコントロールすることもできないのだけれども、研究結果として「5歳では……」というような形で示されるのです。本当は統計的には相関に過ぎないのですが、研究結果の説明や理論化の過程の中で「何歳だったらどう」、もっと言えば「何歳だからどう」というように原因のようにして年齢が使われる傾向があります。

しかも、研究上のコストの問題と関係して、多くは横断研究というデザインで、たとえば0歳の子ども30人、1歳の子ども30人、2歳の子ども30人というように、それぞれ全く関連性のない独立した90人の個人を年齢で3つのグループに分けて、そこから得られる代表値(平均値等)をもとに各年齢の母集団の平均を推定し、0歳児は……、1歳児は……、と議論していく。こういう横断のデザインが圧倒的に多いのです。横断研究ですと、発達の軌跡・プロセスというものは実際に検討できないわけで、研究結果を誤解なく正確に記述すれば「年齢(月齢)による違い」が検討できるだけです²。

この北大の発達研究は例外的というか、非常にコストのかかる縦断研究に取り組んできた数少ない研究室がありました。愛着や気質に関する優れ

*北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター

た研究を発信し、日本の発達心理学界の重要な拠点だったと思います。ただ、やはりコスト的な限界があったのか、陽の目を見ていないデータも多く残っているようです。個人個人を長く追跡していくという発達研究は難しいし、十分行われてきたとは言い難いのです³。

一方で、発達心理学そのものが、学校教育、つまり年齢を輪切りにした形での教育階梯に応えるようにして台頭してきたという背景も無視できません。発達の質的区分は、研究上内在的に導かれるというのが本筋のように思えますが、実際には6歳と7歳であれば幼児教育か初等教育かという境界が政策的にひかれているわけで、どうしてもそのバイアスに引っ張られるということがあります。とはいえ、発達現象は教育システムと不可分一体のものだと思いますから、因果論で考えると卵とニワトリの循環論に陥ります。ここで確認しておきたいのは、年齢区分というものが実際は社会的に規定されているにもかかわらず、研究内的な独立変数として扱われていることへの疑問です。

(2) 個人の所有物としての「能力」

2番目の「獲得」についてです。能力を個人の獲得物・所有物として理解する方法は、近代的な観念そのものといえます。何か個人が行動したり、できたりすることについて、それを個人の所有物の所産とみなすのです。その獲得・所有された能力というものが、例えばIQのような指標で測定され、それがその個人の潜在的可能性として捉えられます。IQ125を「持って」いても何ができるか分からないのだけれども、潜在的な可能性としてそこに価値が置かれるわけです。IQは標準化の度合いが高い指標ですが、発達心理学で使われる指標には行動レベルのものも多く、また観察という行為は相互的なものですから、特に社会的行動の指標となると純粋に客観的とはい切れません。行動反応自体を対象児の所有物とみなすことにも本当は無理がある。でも、研究上、その反

応は個人の所有する能力の発露であるという暗黙の前提があります。その能力が実際にその個人の生活とどう関係しているのか、というよりは潜在的可能性の部分に価値が置かれて発達が語られます。

私としては、発達心理学における「獲得された潜在的可能性としての能力」に対する偏重が、人間発達研究における生活の視点の喪失と結びついている思うところがあり、能力の獲得ではなくて、実際にある能力が個人の現実生活の中でどう実現しているのか、社会的・文脈的な「実現の相」で発達を捉える、そういう理論化をしていきたいと思っています⁴。

(3) 「定型」と「非定型」

3番目は「定型」です。定型(的)という言葉はtypicalの訳語で、これに対するものとしてatypicalが非定型(的)と翻訳されている概念です。おそらく、1990年代になって発達心理学ないし発達精神病理学の中に流布したものと思われます。これは従来の健常と障がい、正常と異常、標準と外れ値というような大ナタを振るような質的区分に対して、グラデーション(連続体、スペクトラム)で捉える発達の考え方として出てきたのだと思います。

発達のプロセスにおいて、例えば発達障がいなどは、小さい時には兆候があるものもありますが、予後が良くわからないものもあります。自閉症ですと、「折れ線型自閉症」と言われる一群があり、1歳半とか2歳とかになって、それまでに獲得されてきた能力が急激に退行・消失してしまうという特異な発達プロセスをたどる症例もあります。何かの能力は非常に高いけれども別の能力はかなり制限されているといった発達の凸凹、アンバランスによって社会適応上の問題が生じてくる例も少なくなく、こうした細かい機能・領域別の集合として発達を理解する領域固有性(domain-specificity)というアイディアの広まりも、定型-非定型の連続体で発達をみるという発想が必要と

された背景だと思われます。

定型というと、多数派とか標準的ということなのかと思われるかもしれませんが、どうも単純にそうは言えない状況があると思っています。実際には、本人も周囲も定型と思って生きてきた個人が、後々不適応が起こってから遡及的に非定型の発達だったのだという理解が呼び出されることもあって、後付けのこともあるのです。定型／非定型という概念が研究上も実践上も色々な混乱を生んでいるように感じています。緻密な論理があるというわけではなく、あくまで現場を歩く中で捉えているインプレッションですが、次のような事態が生じているのではないかと思います。すなわち、「定型発達」という概念が登場してから、ある種の“つり上げ効果”が起こり、「ふつう」であることのハードルを高くする力学が働いているように感じているのです。

標準というのは統計的な概念で、「だいたい何%の範囲」とか「トレンドで一番高いところの前後、SD±いくつ」とかですね、そういう定量的な理解の仕方です。これに対して、定型というのはもっとゆるやかな質的概念で、非定型との連続したスペクトラムで捉えられる一方の極の一定の帯域を意味します。スペクトラムのどこからが定型でどこから先へ行くと非定型なのかという線引きが馴染まないものです。線を引いてしまうと、〈健常／障がい〉の二分法に戻ってしまうからです。

連続体であるために「安定した定型」という確信が得られにくく、多くの人が「わが子も、担任をしているこの子も、いや私も発達障がいではないか……」という不安を惹起しやすい。保育の現場に出入りすることが多いのですが、ここ10年ほどはそうした不安を聞かない園はないというくらいです。連続体で捉えるという発達の考え方が、むしろ非定型が定型を飲み込んでいくようにして、非定型の帯域をどんどん広げるような力学として働いているように思われるのです。今日、発達心理学において発達概念を再検討する際に、この定型／非定型という枠組みのもつ影響力を無視しないわけにはいかないと考えています。

(4) 乳児観の変遷

3つの前提について簡単に述べさせていただきます。次に、再び能力の獲得という問題をめぐって、私の専門とする乳児の研究領域に関連してお話しさせていただきます。それは発達研究における乳児観についてです。発達心理学が一般に認知されるようになってからまだ100年も経っていませんが、その少し前の時代から小さい子どもを対象とした研究は始まっていました。ただし、実証研究はまだ不十分で、逸話的な記録や思弁的な考察が中心でした。

近代心理学が始まった19世紀末では、たとえばウィリアム・ジェームズの“Blooming, buzzing great confusion”（咲きほこるガヤガヤとした巨大な混沌）という表現にあるような乳児観が支配的でした。乳児というのは感覚は混線し、認知能力も微弱で、移動・運動もできないし、およそ組織化された適応能力を持っていない無能な存在なんだと。乳児があんなに泣くのは、混沌としたぐじゃぐじゃの世界に対する悲鳴なんだというような乳児観があった。

その後20世紀の前半に、ご存じのジャン・ピアジェが人間の形式論理的な科学的知性の出発点には、乳児における感覚運動的なモードによる知的活動があり、それは最初から良く組織された規則性を持っていることを証明していったのです。科学的知性の出発点としての乳児、自ら能動的に環境に関わり、自己を自律的に発達させる乳児という能動的乳児観の登場です。ピアジェはすぐれた観察眼の持ち主で、実験手法も独創的なものを多数開発しましたが、20世紀中ごろまではまだ映像テクノロジーが十分ではありませんでしたし、幼い乳児の感覚・知覚機能を正確に測定できる装置もありませんでした。ですから、基本的にはある程度ライブで観察して分かる程度の行動を頼りに、乳児観が構築されていたといえます。

それが1950年代になって、映像テクノロジーと情報科学が一気に発展し流通するようになりました。これが発達研究における乳児観を大きく変え

ることになったのです。後に、“competent infant”というキャッチフレーズで言われるようになる「有能な乳児観」です。これは発達心理学が人口に膾炙しはじめる非常に大きなエポックをつくったと思われます。ロバート・ファンツという人の、選好注視法という実験方法を用いた乳児の視覚的弁別に関する研究が「有能な乳児観」の発端としてよく取り上げられます。乳児がシンプルな図形よりもより複雑な図形を好む（長く注視する）こと、また単に複雑な図形と言っても人の顔に似たパターンを特に好むことなどが明らかにされました。ジェームズの時代に、混沌としたおそろしい世界にいたと思われていた乳児が、実は非常に整理された知覚世界に暮らしているということが分かってきた。乳児にも教育可能性があるのではないかと、いわゆる早期教育法が発達心理学の知見に基づいて登場するようになったのも、前世期の半ば以降の事象です。

competent infant という考え方は、今も乳児研究の主流を占める観念だと思います。ただ、確かに乳児はかつて考えられていたよりも“有能”なのですが、実際にその子どもの生活（サバイバル）を考えたときに使える能力なのか。実験的に統制され人工的に構成された特殊な環境下でのみ発現する能力を、人間発達の本質として取り上げて良いのかどうかということには疑問が生じます。むしろ、人類の乳児は非常に未熟であるということの方に目を向けてみた方が、現実を生きる乳児に迫れるのではないかと。

私は neo-incompetent infant（新・未熟な赤ちゃん論）と呼んでいるのですが、人類乳児というのは未熟であり、未熟期間が長いというところに、むしろ種としての発達を規定する本質があり、後の高度な精神発達を支える土台になっているのではないかと。多分こういう考え方を発展させてきたのは日本の研究者だと思います。京都大学霊長類研究所や滋賀県立大学教授の竹下秀子氏らが、霊長類との比較発達科学的な観点から人類の個体発生の特徴を検討する中で、人類の普遍的な発達遅滞現象にこそ高次精神機能への命脈があるとい

う1つのストーリーが描かれてきたといえるでしょう⁵。

(5) 「有能な乳児」はどこにいるか

現代の赤ちゃんたちの生活を考えると、「乳児の有能さ」に関する研究知見が流布してきた中で、赤ちゃん時代からコミュニケーション能力などの個体能力の増長に期待が集まるようになる一方で、子育ての営みが非常に孤立しているという一般的課題があります。女性の社会進出が進んで、共働きが増えたといっても、今も0、1、2歳児の約70%は家庭で養育を受けています。その家庭を包囲する育児システムの脆弱さが想像以上に進行しているということに対して、目を向ける必要があります。乳児の能力に注目するところから発達研究を出発させるということそのものを転換させたい。そこで、能力の「獲得」と「実現」ということを考えてみたいと思います。

「有能な乳児」とは、いったいどこにいるのだろうか。例えば、バーバラ・ロゴフという研究者がアフリカ・コンゴ共和国のエフェという民族の生後11か月児の例を紹介しています⁶。その子が、大人が使う大きな鉈を持って堅い木の実を割ろうとしているシーンです。いまの日本であれば、危険な場面、止めさせなければならない場面として大人の目に映るでしょう。しかし、エフェの人たちは、それは乳児期に期待される発達の姿だということです。彼女らにとって、乳児期の発達課題は刃物と火に関心を持つことなのです。

一方、イタリアの乳幼児教育で有名なレッジョ・エミリア市の実践で、乳児の有能性を捉えるためにしばしば紹介される次のような一連の写真パネルがあります⁷。生後10か月の赤ちゃんが、先生と腕時計のカタログを見えています。赤ちゃんは先生が左手にはめている腕時計に気づいて触ります。すると、先生が自分の腕時計を赤ちゃんの耳に当てます。きっと、赤ちゃんにはコチコチコチという音が聴こえたでしょう。赤ちゃんは目を見開いて驚いたような顔をし、何かに気づいたよ

うに、今度はカタログに耳を当てます。何気ないが、よく配慮された大人とのやりとりの中から、赤ちゃんの環境世界への関心と学びが成立していく局面を切り取っていると思います。

時計についての認識を深める10か月児にみる有能さと、先ほどのエフェの大人たちが11か月児に期待する有能さとは、一見かなり異なるもののように見えます。知性という面で考えると、時計の事例の方が知的なもののように感ぜられるかもしれません。しかし、いずれもその有能さは社会的に構成されたものであり、それぞれのコミュニティの価値づけと調和した姿といえます。問題は、どちらの発達により優れているかというような一次元的な能力論ではありません。

それらは、個体としての乳児の有能さに還元できません。そこに我々が見ているのは、ある期待される発達を実現しようとする「関係的な力学」だと考えられます。0歳の子どもに鉈と火に関心を待って使い始めるということに期待を持つ力学が作動する中で、それが成功するように大人も子どもも環境も協調的に導かれていきます。レッジョの実践であれば、自然や人工物に対する関心を育み、認識を深めていくことを期待して乳児と先生がやりとりを展開しようとする力学が働いているのだと思います。

発達心理学がもっとチャレンジしなければならないのは、実験的環境下における乳児の人工的な個体能力ではなく、関係的な力学の所産としての能力とその実現のあり様ではないかと考えています。さらに、ミクロな場で実践される関係的な力学を、ある仕方で作動させるより広い生活文脈のシステムを検討することも、隣接諸科学との協働の上に期待される役割でしょう。

(6) 反抗期を生み出す関係的な力学

別の例を出してみます。乳児からもう少し大きくなって2、3歳になりますと、第一反抗期といわれる特有の拒否的態度が目立つようになるといわれます。「何々しよう…」→「イヤイヤ」、「こっ

ちは…？」→「イヤイヤ」と、とにかく執拗に反抗的態度を見せる年齢期として、2、3歳は発達心理学の教科書でも位置づけられてきましたし、保育・子育ての実践でもそういう年齢だと予測されています。先に紹介したロゴフは、様々な文化圏のフィールドワークを通して、そうした拒否的な2、3歳児の姿というものが、中産階級ヨーロッパ系アメリカ人のコミュニティに顕著であることを報告しています。これは中産階級ヨーロッパ系アメリカ人コミュニティに限らず、その価値観を共有する、あるいは影響を受けた現代日本の子育てコミュニティも含まれると考えられます。対して、より大きな子どもや大人の生活と分離されていないコミュニティで暮らす2、3歳児では、拒否的な態度はあまり見られないし、大人たちもそういう年齢として予測もしていない。行動現象としても発達期待としても、第一反抗期の存在を確認できないコミュニティが多いというのがロゴフの観察です。

その理由として考えられることの1つに、コミュニティにおける2、3歳児の位置づけがあります。しばしば、2、3歳児を拒否的とみると、本当はこういうふうにはできるといいのだけれどもまだ小さいからできないというような感じで説明されます。本当は我慢できれば良いけど、能力が足りないから「イヤイヤ」してしまう、という考えです。そこには、年齢が下であることと、能力が劣っていることを等価とみなす発達観があるとロゴフは指摘しています。

ロゴフがフィールドにしているグアテマラのコミュニティにも、幼児の反抗期は予測されていないといいます。その路地裏での遊びの様子を紹介した写真には、手前に5、6歳くらいの2人の少女がおり、奥に2歳くらいの男女の幼児がいます⁸。大きい子がトルティーヤづくりのままごとをしていて、小さい子はさらにそのままごとをしているようにみえます。こういう遊びの場面等で見せる子どもの姿には、2、3歳には2、3歳の社会的な地位があって、それは大きい子どもには代わりができないものだというふうに捉えられてい

るとロゴフは述べます。小さい子には、小さい子だからこそ果たせる社会的役割があると考えられているのです。そこには、一次元的な個体能力軸ではなく、小さいゆえの価値があります。そうしたコミュニティでは、「できないこと」を悪とする発達観の下で実現してしまう第一反抗期のような現象は生じにくいのではないかと考えられます⁹。

(7) 異年齢期のカップリングで発達を考えること

私が最近考えているのは、子ども個人の年齢に沿った獲得能力を発達と捉えるような視点ではなく、むしろ異年齢の者同士がお互いに補い合って活動が成立しているような場面に注目するアプローチです。仮にこれを「異年齢期発達カップリング論」と呼んでおきます¹⁰。

例えば、写真家の土門拳による「切り株」というタイトルのついた写真があります¹¹。昭和28年の秋田で撮影されたものです。10歳前後と思われる少年たち数名が、だいたい1歳から3歳頃と思われる幼児数名と一緒に大きな切り株の上に乗ったりして、集まっている場面です。その写真の中で、幼児は少年に背負われたり、少年に寄り添って座っていたり、少し離れたところで遊んでいたります。中には、切り株の上からいまにも落ちそうな幼児もいます。2歳頃になると運動能力が高くなってくるので、このようなスリリングな挑戦をしたくなる時期です。ところが、大人だと注意能力が高すぎることもあり、切り株の縁に行くよりもかなり早い段階で、干渉したり、制止したりしやすいものです。これに対して、10歳くらいの子どもは適度に注意散漫なところがあるので、結構ざりざりになるまで放置して、本当にヤバいところで背中を掴んで引き戻すみたいな感じになります。

5、6歳だとまだ自分の遊びに夢中になってしまうと注意が周囲に行かなくなるので、2、3歳児を任せておくにはリスクが大きいのです。10代前半くらいは、注意力が適度なのです、2、3歳

を「泳がせて、満足させる」ために。ですから、自律性の育ってくる2、3歳児にとって10歳くらいの子どもはありがたい存在なのではないかと思うのです。しかし、日本でもこの30年か40年かの間に、「2、3歳と10歳」のような異年齢期カップリングはほとんど消滅してしまいました。この消滅過程と、2つの反抗期（第一と第二）の顕在化過程が、反比例するかたちで我々の社会に起こったことには偶然以上のものがあると考えています。

最近、私は沖縄の多良間島という離島に残る『守姉』（モリアネあるいはムリ アニ）という伝統的子育て習俗に関する調査研究に加えてもらっています¹²。そこでは10歳くらいの子ども（多くは女児）と乳幼児が一緒になって生活するということがまだかなり残っています。早稲田大学教授の根ヶ山光一氏は、これを霊長類にある程度共通してみられるアロマザリング（母親以外による子育て）の人類における実践ととらえています¹³。

10代の少年少女が幼児の面倒を見ているとき、我々はよく「子守り」と言ったりします。しかし、私は10代の、つまり思春期の発達にとっても重要な意味があるのではないかと想像しています。思春期と幼児期という2つの年齢期が組み合って生活することそのものが、それぞれの年齢期の次の発達にとって本質的に必要な経験を内包しているという仮説です。

(8) ひとまずのまとめ

まとめです。人間発達の原理を個人に求めるということ、個人としての年齢に求めるというのはどういうことなのか、そもそもそこを疑ってみたほうが良いのではないかと。人類というのは、アロマザリング、つまり母親以外が育児にかかわらないと上手く子どもが育てられない／育たない種だと言われているわけですが、異なる年齢期が組み合って生活する実践性にもっと注目すべきではないかと考えます。異年齢の者同士が関わる生態学的な含意というものを検討する必要があります。

特に、幼児期と思春期というのは人類に顕著な中間的な年齢期であると進化人類学で指摘されています¹⁴。幼児期の特に前期（2、3歳頃）というのはいかなり体力や身体の実用性が高くなってきているのですが、労働は延長されている。5、6歳になると周皮的なものです、労働に関わることができるようになる。でも、まだだいたい労働が免除された年齢期です。幼児期の子どもにとっては、遊びが最も重要な成長資源になると考えられます。一方、思春期は生殖能力を備えてくるが、生殖の実現は延長される。幼児期と思春期は、持っている能力を十分に発揮するのが難しい年齢期といえます。

幼児期と思春期というのは、いずれも自分たちが自覚している能力と社会的に実現できることの乖離が相対的に大きくなる年齢期なのではないでしょうか。これは過去も現在も基本的に共通した、人類のライフサイクルの特徴ではないかと思われまます。人類史の中で、両年齢期の人たちは、かつては生活圏を共有してお互いによく関わっていたはずで。学校教育が普及するようになって、2つの年齢期の生活圏の分離が急激に進んだと考えられます。育児の練習や子守というよりも、質の異なる未熟さを持っている年齢期が生活を共にするというそのものに、人間発達の原因に関する重要な含意があるのではないかと。最近はそのような観点を持って研究を進めつつあるところでは。

注

- ¹ 「研究プラットフォーム委員会」とは、2011年度から2013年度まで附属子ども発達臨床研究センターに設置された発達支援に関わる領域横断研究および交流実践研究の試行的な組織化を任務とした委員会である。詳細は宮崎（2014、研究プラットフォーム委員会：活動報告 子ども発達臨床研究、5、59-61）を参照されたい。
- ² 川田、2011
- ³ 北海道大学教育学部では、1966年に発達心理学講座がつくられた。これを主宰したのが三宅和夫助教授（当時）である。三宅（2004）には、1970年代当時において生態学的かつ縦断的なアプローチによる母子相互交渉の研究がいかにコストのかかるものであったかが記されている。

る。

- ⁴ こうした着想は、個体能力ではなく意味世界から発達を再考しようとしている浜田寿美男の一連の著作に影響を受けている（特に2つの『序説』。浜田、1993、2009）。なお、川田の場合は、意味世界というよりも、個人と社会の緊張関係の中から社会的に価値づけられた行為カテゴリが発生する点に注目して「実現」という言葉を使っている。後述する「反抗期」はその例である。
- ⁵ 竹下、1999、2001
- ⁶ Rogoff、2003/2006、p.4
- ⁷ 例えば、Edwards、1998/2001やHendrick、1997/2000
- ⁸ Rogoff、前掲、p.162
- ⁹ 川田、2014
- ¹⁰ 異年齢「期」としているのは、「異年齢保育」のように比較的近い年齢の子どもどうしの関係ではなく、ライフサイクル上区分される発達の質に異なる年齢群（例：乳児期、思春期）の関係を意味するためである。
- ¹¹ 土門、2002
- ¹² 研究プロジェクトのリーダーは早稲田大学教授の根ヶ山光一氏。2013～2015年度の研究期間で、「離島におけるアロマザリングの総合的研究：守姉の風習を中心に」の研究課題名の下、文部科学省・科学研究費補助金（課題番号：25285186、研究代表者：根ヶ山光一）の助成を受けて調査研究を行っている。
- ¹³ 根ヶ山、2012
- ¹⁴ Bogin & Smith、1996

文 献

- Bogin, B., & Smith, B. H. (1996). Evolution of the human life cycle. *American Journal of Human Biology*, 8, 703-716.
- Edwards, C., Gandini, L., & Forman, G. (1998). *The hundred languages of children: The Reggio Emilia approach-advanced reflections* (second edition). Stamford: Ablex Publishing Corporation. (Edwards, C., Gandini, L., & Forman, G. (2001). 子どもたちの100の言葉：レッジョ・エミリアの幼児教育（佐藤学・森真理・塚田美紀、訳）。神奈川：世織書房）
- 土門拳（2002）。土門拳 腕白小僧がいた 東京：小学館
- Hendrick, J. (1997). *First steps toward teaching the Reggio way*. NJ: Prentice-Hall, Inc. (Hendrick, J. (2000).レッジョ・エミリア保育実践入門：保育者はいま、何を求められているか（石垣恵美子・玉置哲淳、監訳）。

- 京都：北大路書房)
- 浜田寿美男(1993). 発達心理学再考のための序説 京都：ミネルヴァ書房
- 浜田寿美男 (2009). 子ども学序説 東京：岩波書店
- 川田学 (2011). 発達理解の発達のために (発達心理学的自由論1) 現代と保育, 81, 96-107.
- 川田学 (2014). 再考・二歳児の形容詞 (発達心理学的自由論7) 現代と保育, 87, 104-117.
- 三宅和夫(2004). 20世紀中葉からの発達心理学：自己の体験を織り込みながら 三宅和夫・陳省仁・氏家達夫, 「個の理解」をめざす発達研究 (pp15-55). 東京：有斐閣
- 根ヶ山光一(2012). アロマザリングの島の子どもたち：多良間島子別れフィールドノート 東京：新曜社
- Rogoff, B. (2003). *The Cultural Nature of Human Development*. Cambridge: Oxford University Press.
- (Rogoff, B. (2006). 文化的営みとしての発達 (當眞千賀子, 訳). 東京：新曜社)
- 竹下秀子(1999). 心とことばの初期発達：霊長類の比較行動発達学 東京：東京大学出版会.
- 竹下秀子(2001). 赤ちゃんの手とまなざし 東京：岩波書店